

## セメスター留学における教育現場訪問：カナダの外国語教育での学び

Randy Muth<sup>1)</sup> 福島 玲枝<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 畿央大学教育学部現代教育学科（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

### Semester study abroad program extracurricular public school visit: An experience in Canadian foreign language education

Randy MUTH<sup>1)</sup> Akie FUKUSHIMA<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> Department of Education, Faculty of Education, Kio University

(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara 635-0832, Japan)

**要約** 本報告は、畿央大学教育学部英語教育コースにおけるセメスター留学の一環として実施した、カナダのビクトリア市公立高等学校訪問についてである。そして、学校訪問の実施背景、訪問先の教育方針、実施内容、そして学生の学びを整理し、プログラムの意義と課題点を明らかにすることを目的とする。ブリティッシュコロンビア州では、英語を第二言語として使用する生徒を無理なく学校環境やカナダの社会に適応させるための教育支援体制がある。学生たちがその学校訪問から得た実践的な経験や学びの振り返りは、今後の留学プログラム実施に向けた事前、事後指導の改善策を示唆するものといえる。

Keywords：カナダ、第二言語、教育、セメスター留学、学校訪問

#### 1. はじめに

畿央大学は、グローバル人材育成に向けた動きを鑑み、英語教育コースを新設することで新たな学びの選択肢を提供し、進路の可能性を広げた。このコースの特徴は、4年間の在学中に半年間のセメスター留学に参加できる点である。学生たちは英語を第一言語とする環境で生活する経験を経て、自然な形で異文化コミュニケーション能力を身につけ、英語運用能力を高めることができる。また、英語教員を志望する学生に対しては、滞在先の外国語教育現場を訪問し、見学する機会が設けられている。この学校訪問は、現地の教育方針について学び、英語教育の実践を見学することができる貴重な学びの機会であり、セメスター留学プログラムでの重要な位置づけとなっている。本報告では、その学校訪問の実施背景や訪問先のビクトリア州および現地における教育方針の特色、また、訪問の内容、そして学生が得た学びを整理した上で、セメスター留学プログラムの意義と課題点を明らかにする。

#### 2. セメスター留学実施背景

セメスター留学は2020年に新設された英語教育コースのカリキュラムの一部で、さまざまな進路希望を持つ学生に対応し、高度な英語力を必要とする社会に対

応可能な人材を育成するために検討を開始した。構想段階においては、学生自身が、カナダ、イギリス、ニュージーランドの三カ国から、留学プログラム内容について情報を収集し、比較検討した上で決定するとの流れを想定していた。しかし、パンデミックの影響で計画は頓挫し、再検討にあたっては、留学生に対する出入国の制限緩和が条件となり、その結果、他の国よりそれが比較的穏やかであったカナダに絞って、2022年度に初めてプログラムを実施するはこびとなった。

カナダのセメスター留学研修先は、以前から短期語学留学（春期）プログラムの研修先となっている語学学校である。セメスター留学と短期語学留学の場所と時期を一部重ねることで、より教員の目が行き届きやすい形で学生の安全に配慮し、効率的に運営することができると判断した。本来は、2回生を参加対象者として、後期（9月から3月）に実施予定であったが、パンデミックの影響で2021年度の実施を見送った事態に鑑み、学修の機会を保障するために、3回生も共に参加できる形で実施した。

#### 3. ブリティッシュコロンビア州におけるコアカリキュラム

カナダは、読解力、数学、理科においてOECD（経済協力開発機構）加盟国中で上位の成績を収めている<sup>1)</sup>。そして、教育水準、男女平等や教育年数などの項目で、

OECD平均の79%を大きく上回り、世界において、高く評価された教育制度であると認められている。また、カナダの教育制度は州政府によって管轄され、各州の教育省が教育スタンダードを設定し、それぞれの地域的な特色や、文化、歴史などを反映したカリキュラムを組むことができる。

学生の滞在先となったブリティッシュコロンビア州は、カナダで3番目に人口が多く、2012年より独自の教育方針を導入し、教育思想の時代変遷に先行している。この改革では、全体的な学力向上だけでなく、教育をより適切、かつ魅力的なものにし、急激に変化する世界の状況に適応させ、すべての児童・生徒・学生に利益をもたらすことを目指している。また、先住民(First Nations)の考え方をカリキュラムや学校教育の文化に取り入れることを重視する。

そのカリキュラムで基盤となるのは、Communication(コミュニケーション)、Thinking(思考)、Personal and social(個人と社会)の要素から成るコアコンピテンシー(核になる能力)である(図1)。これらは、すべての児童と生徒が生涯にわたって深く学ぶために必要な、知的、個人的、社会的、情緒的な能力のことで、幼稚園から高校までのカリキュラムと評価システムの中核を形成する。新たなカリキュラムでは、標準学力テストよりも、コアコンピテンシーにおける知識の応用を重視し、伝統的な授業の成績による評価から形成的評価を重視する方向へと変化した。



図1 (出典: British Columbia BC's Curriculum, <https://curriculum.gov.bc.ca/competencies>)

この新しい教育方針は、生徒の自主性を重視し、ホリスティックな学習経験と成果を中心に据えることを目指している。興味深いことに、この革新的教育方針の目標は、伝統的な学力の育成を主たる焦点としていないにもかかわらず、学力成績の向上につながる兆候を示している。2020年にカナダの公共政策シンクタンク、フレイザー研究所が行った調査によると、ブ

リティッシュコロンビア州は、生徒1人当たりの公費負担教育費がケベック州に次いで最も低いにもかかわらず、PISAの読解力、数学、理科の点数で、予算の多い州を上回る結果となった<sup>2</sup>。

#### 4.ブリティッシュコロンビア州言語教育政策

カナダでは、移民を積極的に受け入れる政策において長い歴史があり、その結果、人種、文化的に多様性の豊かな社会となった。その多文化主義がカナダ国民のアイデンティティ形成において重要な役割を果たしている。移民政策は1960年代から積極的に推進され、現在の移民の割合は、カナダ全体の人口の約23%である。また、移民率が世界で最も高い国の1つであり、その中でもブリティッシュコロンビア州では、移民の人口の割合は特に高く、30%弱を占める<sup>3</sup>。

この大規模な移民の流入にカナダ社会が対応するためには、進歩的な英語教育政策を実施する必要があった。2009年にはEnglish Language Learning (ELL)(英語言語学習)ポリシーのガイドラインが導入され、家庭内で英語以外の言語を話す生徒を対象とする支援や補助金対象条件が定められた。またそれに基づき、初中高等教育機関において、英語教育の支援体制が整備されている。ELLの支援内容には、英語の第二言語学習スペシャリストや、他の専門家(カウンセラー、心理学者、言語病理学者、統合支援教師、資格を持つ通訳など)からのサポートも含まれ、対象生徒は基本的に5年間支援を受けることができる。しかしその間も、定期的なアセスメントを受け、ELLの支援の継続が必要か、支援なく平常の学級で学習する英語能力があるかが評価される。

このようなELLの支援体制の方針の原理は、次の8つの項目で構成されている。

1) ブリティッシュコロンビア州の学校制度と社会において、英語の言語能力とカナダ文化に対する知識は、学生の成功に不可欠であり、2) 学業的な文脈で活躍するのに、社会的および学術的な言語の能力の両方が必要であり、3) 学生が学校や社会で活躍するために、個々の第一言語と文化を尊重し、その価値を認めることが重要で、複数の言語に習熟することが、学習の向上につながり、4) 学生が第一言語または方言を維持すると、教育的、社会的、感情的、経済的な利益が生じることがあり、5) 学生が習得している言語は、他の言語の習得と相関関係にあり、その知識を英語の言語学習の課題に活かすことができ、6) 学生の文化的アイデンティティは、指導法によって尊重されるべきであり、教育者は全ての生徒に、文化の多様性と文化



的アイデンティティについて教えるべきであり、7) 特別なニーズを持つELL生徒は、言語能力と特別なニーズの両方に対処するサービスが必要な場合があり、8) 保護者は教育者と連携して子供の教育において重要な役割を果たし、学習プロセスに積極的に参加するよう奨励されるべきである<sup>4</sup>。

## 5. ビクトリア高校の概要と同校における外国語教育

今回の学校訪問の目的は、生徒の個性や学びに対応するカナダの教育政策下で実施される外国語の集団授業を見学し、日本の英語教育への応用可能性を考えることである。その訪問先として、1876年に開校した、カナダ西海岸での最古の公立高校であるビクトリア高校を選定した。そこでは校訓として「PALMA NON SINE PULVERE (努力なくして報酬なし)」という精神を掲げ、特に生徒に時間厳守、授業の準備、忍耐力、注意力、教材の復習などを通じて100%の努力と高い学習意欲を持つことを目標に定めている。また、学校はブリティッシュコロンビア州人権規約に基づき、人種、肌の色、家系、出身地、宗教、配偶者の有無、家族の有無、身体的または精神的障害、性別、性的指向、年齢による差別のない学校環境を促進することをハンドブックに明記している<sup>5</sup>。

授業の大きな枠組みは日本の全日制の公立普通科高校と重なる部分が多い一方で、細かな設定部分では多様な学びを受け入れる姿勢が見て取れる。まず、授業時間帯は通常8時10分から15時35分までであるが、金曜日は午前中のみで、生徒の出席が必須となるのは、9時から11時半までの授業である。それ以外の時間帯は、各生徒が興味関心に合わせ、入学時に選択した授業実施言語（英語かフランス語）のコースで開講されている授業から、1セメスターあたり最低8科目を履修し、時間割を決定する。また、各授業のクラスサイズは必修科目で最大29人、選択科目で最大15人となっており、卒業までにそれらの授業で80単位を取得することが求められる。

多様性を認める同校の特色は、生徒の抱える様々な課題に対応する支援体制にもある。まず、複数の専門分野をカバーするスクールカウンセラーが一つの専門の建物に常駐し、家庭生活、発達、精神面など、幅広い問題に対応できるように配慮している。また、図書館に配属されたサポートスタッフも多く、課題の資料検索などの支援、英語を母語としない生徒への言語学習の補助、授業進度に悩む生徒への手助け、更には教師の授業準備の補助的役割も担う。このような学習面や心理面からの手助けを行う段取りが、生徒個々の成

長を促すための取り組みの一つであるといえる。

今回は、訪問する学生（英語教育コース2、3年生、8名）が英語教員になることを志望しているという背景も考慮し、外国語（英語）教育に焦点を当てた二つの授業を見学する許可を得た。一つは留学生向けの英語の授業「イングリッシュ・ランゲージ・サポート」である。そこでは、TPRS (Teaching Proficiency through Reading and Storytelling) という教授方法を取り入れている。これは言語と身体の動きを結びつけ、具体的な語彙の習得に焦点を当てたTPR (Total Physical Response) に起源を発し、抽象的な語彙や文法、複雑な言語スキルを教えることに対するTPRの限界を補う形で、2000年頃にアメリカの言語教育で急速に成長した手法である。当初、1980年代後半までは、TPRはナチュラル・アプローチと組み合わせた形であったが、1990年代には生徒の授業への集中力を高める目的で、語り(storytelling)を導入したとの流れがある<sup>6</sup>。

よって、この手法を用いる授業では、教師は単に文法規則や語彙リストを教えるのではなく、生徒の興味を抱く話題を取り入れ、言語を自然な流れで学ぶ機会を提供することが求められる。授業では、生徒に対してターゲット言語でのストーリーや読み物を、わかりやすく繰り返し提示し、コミュニケーションを促す<sup>7</sup>。その学習を積み重ね、生徒が言語の知識だけでなく、実際に話したり演じたりする機会を通して、統合的な言語スキルの向上を図ることを目指している。授業者のMs. McKayはこのアプローチに基づく授業運営方針について、「先生の語りや生徒たちとの会話を通して、コミュニティーを築き、外国語の使用環境を自然な形で作り出すこと」、そして「指導すべき語彙や文法を繰り返し導入すること」の重要性を強調していた。

二つ目に見学した授業は「フランス語イマージョン」の授業である。このプログラムは、ブリティッシュコロンビア州政府が支援するもので、英語圏の生徒にフランス語のバイリンガルスキルを育成することが目的である。フランス語を母語としない生徒を対象とするカリキュラムにおいて、最初の数年間の基本的な授業はすべてフランス語の授業で行われ、基礎が築かれた後に英語で実施する教科を取り入れる。そして、徐々に生徒の母語である英語の授業が増えていく編成となっている<sup>7</sup>。高校卒業まで続くこの長期的な教育プログラムは、生徒の認知的な成長や社会的な発達だけでなく、将来の進路選択を広げること、そして公用語となる二つの言語が対等に共存していくことを考慮した、カナダならではの教育政策の一部といえる。

## 6. ビクトリア高校学校訪問

本章では、コアコンピテンシーに基づく多様性と個の学びを支援する教育政策が、現場の教育実践にどのような形で反映されていたかを報告する。

### 6-1 イングリッシュ・ランゲージ・サポート

「英語の言語サポート(English Language Support)」のクラスでは、英語を外国語として学ぶ生徒たちが75分の授業に参加していた。生徒はタイ、モロッコ、メキシコ、台湾、韓国、日本など12名が様々な国籍を持ち合わせており、生徒の母語を使うことが難しい環境での英語の授業である。

授業では、一見雑談のようにも捉えられる生徒との対話を頻繁に活用しながら、着目すべき文法事項や語彙を指摘し、説明を加え、練習場面を導入しながら学習が展開する。また、教師は説明だけでなく、動画視聴、身体活動を組み合わせたアクティビティなど多くの活動を取り入れる。生徒の参加を促すことで集中力を維持し、アウトプット技能を伸ばすことを意識した形で授業を構成していることがうかがえた。教材は、特定の教科書を使用せず、教師が用意したプリント、また一人生徒の英作文などを共有して、文法や文構成などの知識部分を伝達し、その大部分も生徒とのやり取りを通して進行する。また、教師の質問、生徒の回答に基づいたさらなる発問は、生徒が異なる視点を抱くことを尊重し、考えやイメージを自由に表現することを促す。それらの些細なやり取りの積み重ねが、他者を尊重する教師の授業姿勢の提示となり、やり取りが学びを提供するものとしてお互いが認識する学習環境が築かれる。つまり、教師と生徒が築き上げた授業ルールが生徒たちの学びを支えていたといえる。

自然に生じた会話を外国語学習、さらには生徒指導にまで繋げる一つの具体例として、遅刻して入室した生徒に対する授業中の教師の対応を詳述したい。その授業見学時は、見学している学生と引率教員だけでなく、ビクトリア高校の教頭も同行し教室後方に座っていた。しかし、授業開始から20分以上経過した後、一人の生徒が入室し、教師に謝罪の意思を見せることなく着席しようとした。それを見守る教室の他の生徒たちは、驚きや困惑とも捉えられる叫び声をあげ、明らかに不適切な対応であるとの認識を示した場面であった。

教師はその遅刻した生徒に対して、明らかに音調に変化させて驚きを示し、「どこにいたの、何をしていたの、時間に気づいていたの、体調は大丈夫なの」と英語で質問を投げかける。それに対し、遅刻した生徒

は笑いながら「友達とラーメンを食べていた」と伝え、その笑顔からは、自分の行為に対する反省や謝罪といった態度を感じ取ることはできなかった。その一連の生徒の行為に対して、教師は声を荒らげる、叱る、反省させる等の行為に移すことをせず、その代わりにさらに具体的なオープンエンドの質問（「そのお店はどこにあるか、誰と一緒にいたのか、どうやって学校に急いだのか」など）を投げかける。時に生徒の答えを完全に理解できない素振りを見せ、他の生徒に補足説明を促し、それに対してさらに追加の質問を行い回答を促すことを繰り返す。それらの行為により、他の生徒とも意見のやりとりが展開する形へ教室対話を方向づけていた。結果的に、遅刻した生徒が理由を共有したことをきっかけに、数分後にはクラス全体が学校の規律を確認し、生徒個々人が持ち合わせる文化規範を共有しあう場面となった。

この遅刻した生徒に対する一連のやり取りが、偶発的な雑談ではなく、教師が一つ一つの瞬間を可能な限りの学習機会として捉え、学びを提供しようとしていることは教師の細かな言動から見て取ることができた。教師はこのやりとりが始まると、当初の授業話題から逸れることを明示するかのように、「探偵」を想起させる帽子を着用し、情報収集と真相解明を明らかにする役割を演じて質問を投げかける姿勢を示す。その後の質問も直前に授業で扱っていた文法事項、そして関連語彙を繰り返し利用しながら、生徒に問いかけ続ける。それらの発問形式に導かれ、遅刻した生徒だけでなく、他の生徒たちも、既習の文法項目に意識を向けて回答し、理解を示しあう。また教師は、生徒が理解していないと判断した語彙や語法については、品詞や文法項目別に整理し、板書に残す工夫を施す。その取り組みにより、黒板は次第に「生徒の対話をサポートするメモ」となり、発話の展開を後押しすることに活用される。表向きは教室全体で遅刻した生徒に遅刻理由を問う、学校生活におけるやり取りの一部でありながら、それは自然な流れで学習項目を応用し、教師と生徒がお互いの価値観を共有する会話へと展開していた。

最終的に、遅刻をした生徒が「自ら」謝罪する行為に至った経緯も、教師との対話を経てこそその結末であった。生徒が故意に遅刻した事実が明らかになった後、教師はビクトリア高校の校則内容と学校のシステムを話題として取り上げる。そして、遅刻を含む、校則を違反する行為が繰り返されると、教頭先生に報告され、その結果、留学生は母国に送り返される可能性があることを確認する。よって、その生活指導の責任者である教頭(実際は教室後方で授業を見学している)



への面識は持っておいた方が良く、と生徒全員に告げ、「教頭先生のお名前（の綴り）を教えてください。」と後方で授業を参観していた教頭に質問を向ける。

質問を受けた教頭は、教室後方から綴りを答えるものの、その時点で話題となっている「教頭先生」ではないことを装い、そして「教頭先生」の容姿や顔立ちを過剰に称賛する話題を提示し、教師と笑いながらやり取りを展開する。教室の前後を介して交わされる会話は、生徒たちを第二の聴衆として位置付ける。よって、不自然な展開に気付いた生徒たちからは次第に笑いが生じることとなった。その文脈から、遅刻した生徒はようやく「生活指導を掌る教頭先生が授業を参観していて、これまでの自分の行為ややり取りは全て教頭先生に把握されていた」との認識を示し、「I'm sorry.」と頭を下げ、自分の行為を振り返った上での謝罪に至った。その態度を受けて、教師は探偵を装うための帽子を脱ぎ、大幅な遅刻に関するやり取りが終了したことを示す。授業の本筋内容から一步脇道に逸れた一連のやり取りは9分程続いていた。

この「教室にいる全員が一人の生徒の問題行動について話を聞く」場面を、日本の学校の生徒指導場面と重ねて捉えると想定外の展開となるだろう。この授業では、一人の生徒の遅刻した事実が学習資源の一部として取り入れられ、それに基づいて展開する、さまざまなトピックについての会話も、新しい語彙の導入や文法の再確認などの機会として活用されていた。周辺地域情報、校則に加え、異なる国籍の生徒同士が自身の立場や境遇、そして考えを自由に表現し合うやり取りは、教師と生徒（遅刻した生徒を含めて）が、お互いに積み重ねてきた授業ルールと信頼関係を共有しているからこそ可能となる。また、突然会話（授業の一部）に参加することとなった教頭も、採用されていたTPRSの理念と「会話から思考を促す」手法を理解し、認めていたがゆえに円滑に展開した授業であったともいえる。このような具体的なやり取りからも、Communication（コミュニケーション）、Thinking（思考）、Personal and social（個人と社会）を主軸としたコアコンピテンシーを、学校の方針として大切にし、それに基盤として外国語教育活動の実践が行われていることを観察することができた。

## 6-2 フランス語イマージョンクラス

フランス語イマージョンの授業は途中から入室し、見学を行ったが、授業では「トラブル解決のために議論をする」場面がトピック課題として提示されていた。教師はまず、生徒2名を無作為に指名する。その生徒たちは数十秒の相談時間を経て、即興でテーマに関連

する場面を想定し、演じるという活動内容であった。生徒同士の事前の相談は、必要に応じて廊下で行うことが許可されていた。

英語を介して授業を実施しない環境であったため、ここで言語習得に関する学習の成果を報告することは差し控えたい。しかし授業の進行は、教師の身振り、声の抑揚、話す速さ、視線の動きなど、非言語要素を通じて理解することが可能となっていた。外国語教育において、言葉以外の要素が意思疎通にどれほど影響を与えるか、そしてどれほど効果的であるかについて、言語が理解できない状況であるからこそ実感できた場面であったようにも思われる。

授業後インタビューにおいて、担当教師は、生徒のフランス語学習歴がさまざまであり、その結果レベルに相当の差があること、そして教師にとって授業運営が難しいことを指摘していた。しかし、授業において言語運用能力差による活動の区別は行っていなかった。言語運用能力に関わらず、授業内の課題やタスクに取り組むその授業姿勢も、教師が生徒の多様な学習背景を尊重し、受け入れ、それに基づいて授業を進める姿勢に基づくものであろう。

さらに、「授業で大切にしていること」として、どちらの教師も共通して次のように語った。「外国語を教えるのは母語話者でないといけないということはない。私自身がその言語の母語話者ではなくても、自信を持って話すことが大切である。」教師が迷いなく、真っ先に伝えたこの授業運営方針も、まさにコアコンピテンシー育成に根付く外国語教育哲学の一部であるように捉えられた。

## 7. 参加した学生の着眼点

外国語教育に焦点を当てた形で実施した学校訪問と授業見学の経験から、参加した学生たちは次の3つの観点で自身の学びを振り返っている。

- ・（それぞれの）授業から何を学んだか。
- ・日本の学校とは何が異なっていたか。
- ・実施されていた授業内容は日本の教育現場に応用できると思うか。

この自由記述のレポート課題<sup>10</sup>において、学生が何を話題として取り上げたかを「教師」、「環境」、「応用」との観点から要約する。

教師の役割が学習に与える影響について、参加した学生たちはさまざまな観点から指摘し、その重要性を振り返っている。具体的には下記観点で教師の役割を要約していた。

- ・生徒に多くの発話機会を与えること。

- ・学習項目を繰り返し取り上げ、活動を進めること。
  - ・学習項目を意識した動画を活用すること。
  - ・活動の難易度を少しずつ上げることで、発話内容を充実させること。
  - ・教師が声の調子や音の抑揚を活用して説明すること。
  - ・教師自身が積極的に、楽しく授業に取り組むこと。
- 各学生の捉え方は様々であるが、具体的な教師の行為を指摘し、そこから導き出された成果を評価し、生徒の学びに関わる教師の役割を捉えることができた点において、今回の見学目的の一つが達成されたものとして評価できる。

また、学生たちは教室環境が授業運営に与える影響の大きさも、授業見学を通して実感することができていた。例えば、教室内で生徒全員の視界に入る場所には、授業規則が掲示され、授業中に使用が許されない携帯電話を収納するウォールポケットが設置されていた。そして、外国語の授業を行う教室では、円滑なコミュニケーションを促進する会話のルール、話を進める際に役立つ接続語の掲示など、コミュニケーション時のトラブルに対応するための手段が視界に入りやすい形で提供されていた。さらに、机を使用せず、椅子のみを用いる教室配置には、生徒同士のやりとりを大切にする教師の授業運営姿勢が示されていた。そのような視覚情報、空間配置、身体の方角付けに対する工夫により、生徒たちは入室した段階で授業に集中する環境へ仕向けられる。そして、それらが生徒同士のやり取りを大切にする授業の構築に大きく影響する。学生たちがこのような環境と学習態度の関係性について、実際の授業見学で学びとったことも意義深いものである。

しかし、学生の回答は、授業見学で得た知見を日本の教育現場で応用する際、直面するであろう困難さや懸念をあらわにしている。物理的な教室環境やクラスサイズに関するアイディアについては応用可能性を論じるものの、教師が実際の授業を行う場面に関して、学生たちはその効果を認識しつつも、実現可能性について慎重な見解を示している。そして、その理由として、日本の学習指導要領や指導案への準拠、長年根付く教師主導の授業展開、教師となる学生自身に必要な知識とスキルの高さなどを挙げている。学生が感じる制約に対し、既存の枠組みへの懸念をどのように受け止め、柔軟性を高める方向へ導くかが、プログラム内容をさらに検討する際の重要な課題であるといえる。

## 8. 今後の展望

日本の教育について学びを深めた学生が、異なる教育システムに基づく教育現場の実践から学ぶことは大きい。このような経験は、教える立場に立った時に気づく学びの多様性から、目的達成のために最適なアプローチを再検討するための貴重な機会である。最後に、今後のプログラム実施にあたり、これらの過程から、セメスター留学プログラムに参加する学生に対して、こちらがどのような配慮を施すべきであるかを二つの観点から考察する。

一つ目は、教育システムの理解を促す段取りである。教育現場の一部を垣間見るだけでは理解と応用に繋げることが難しく、見聞きした実践を模倣するだけでは、効果的な形で自身の教育実践に取り入れることはできない。特に日本と異なる教育方針を掲げる学校での授業展開を理解するためには、背後にある社会的な背景、教育方針を把握する必要がある。目の前の学習集団が、何を授業ルールとして共有し、授業に臨んでいるかを丁寧に考慮した上で、活動の実施可能性や適切性を判断するべきであろう。今回に限って言えば、TPRSの教授法、カナダの言語政策、ブリティッシュコロンビア州の教育方針について、留学前や訪問の事前指導においてももう少し丁寧に扱っておくべきであったのかもしれない。

二つ目は、授業見学から得た知見の応用可能性を、学生が将来関わる教育現場を想定して検討する機会の提供である。生徒にとって有益であると判断した方法や手法は、自身の授業実践に取り入れるための可能性を、先ず検討するべきである。しかし、先述の通り、学生たちは活動自体の適切性でなく、それ以外の要素に基づいて導入可能性に消極的な場合があり、そのような場合は、その姿勢に対して何らかの後押しや手立てが必要となるだろう。新しいアプローチの導入には、学習者や学習環境の理解、そして教師自身が持ち合わせる技量など、多くの事象が関わり、その導入検討過程そのものにも一定の技量が求められる。これらの懸念については、学生が自身の強みを把握し、それを活かした形で実施可能性を考えることが重要である。例えば、事後指導において、見学した授業の根幹となる方針を再確認し、学生自身が関わる教育現場で、何をどのように自身の授業実践に取り込めるのかを具体的にイメージできる機会を提示することも一案である。それにより学生たちが単純に「真似できるか否か」との観点における振り返りから脱却し、客観的に教師の手法を捉えることができたのではないだろうか。

留学プログラム実施に向けては、留学期間で得た学びを学生が最大限活用できるための支援も含まれる。学生の振り返りから判断する限り、現時点で学生自身が持つ前提知識を理由に、応用可能性を狭く捉えていることは、留学期間中に得た学びが将来的に十分に活かされないことも危惧される。得た知識や学びをさらに実践に適用するための道筋の提案、提示などの留学後の支援を検討することで、学びと実践の融合を今まで以上に強化することができるだろう。今後も留学プログラムにおける指導内容、また英語教育コースのカリキュラムの見直しや改善といった部分まで広げながら、学生が留学で得た経験を、実社会で活かせるように検討を続けていきたい。

## 参考文献・注

- 1) Organization for Economic Cooperation and Development (OECD), Education GPS. <https://gpseducation.oecd.org/CountryProfile?primaryCountry=CAN&treshold=10&topic=EO> 閲覧日 2023年8月26日
- 2) Hill T, Eisen B: Quebec and B.C. spend less on education than other provinces: while outperforming most provinces. Fraser Institute. <https://www.fraserinstitute.org/article/quebec-and-bc-spend-less-on-education-than-other-provinces-while-outperforming-most-provinces> 閲覧日2023年9月20日
- 3) Statistics Canada. <https://www150.statcan.gc.ca/n1/daily-quotidien/221026/dq221026a-eng.htm> 閲覧日 2023年9月22日
- 4) English Language Learning, Policy Guideline 2018, British Columbia. <https://www2.gov.bc.ca/assets/gov/education/administration/kindergarten-to-grade-12/english-language-learners/guidelines.pdf> 閲覧日 2023年9月22日
- 5) Victoria High School Course Selection Student handbook 2023/24: <https://vichigh.sd61.bc.ca/wp-content/uploads/sites/26/2023/02/Microsoft-Word-Course-Handbook-23-24-FINAL-Revision-Removed-courses.docx-1.pdf> 閲覧日2023年9月22日
- 6) Lichtman K: *Teaching Proficiency through Reading and Storytelling (TPRS)* . In Routledge eBooks, pp , 2018.<https://doi.org/10.4324/9781315208022> 閲覧日2023年9月22日
- 7) 同上
- 8) BC immersion program. <https://www2.gov.bc.ca/gov/content/education-training/k-12/administration/legislation-policy/public-schools/french-immersion-program> 閲覧日2023年9月22日
- 9) 教頭先生が授業を見学をしていたことは、この時点で遅刻をした生徒は認識していない。教室での反応から判断する限り、授業を受けていた生徒たちも教頭先生が授業を参観しているとの認識がなかったものと思われる。
- 10) 実際のレポートは各項目あたり100語以上の英語でまとめている。